

やっぱりひとこと大相撲観戦雑記  
～平成 23 年九州場所を終わって～

### < 1 > 白鵬全勝優勝ならず

腰の低さと安定性、素早い身のこなしと決め所での機敏な動作は群を抜いていた。このところ苦戦続きである稀勢の里も下し、千秋楽を待たずに優勝を決めてしまった。さらに星を積み重ねて全勝優勝は間違いないと感じていたが、千秋楽に把瑠都に負けてしまうとは思ってもよらなかった。

琴奨菊・稀勢の里などの新しい力に苦戦した時期もあったが、今場所は「充分に対策が考えられていた」という印象であった。「対戦力士についての研究」という点についてはこの横綱はかなり上を行っている。

前半・中盤ともバタバタ・モタモタしていた把瑠都が最後に暴れまくるとは思わなかったのかもしれない。白鵬自身がインタビューに応じて述懐していた「油断があったかもしれない」は本音かもしれない。

### < 2 > 新大関の活躍やいかに・そして旧大関は？

新大関琴奨菊の船出がいかなるものか、多くの人が注目した。九日目まで無敗で進み、ことによると横綱と優勝争いか？と期待を持たせたが、横綱戦の前に連敗してしまい興味半減の結果となった。

連敗の相撲に共通しているのは、それまでの相撲の柱だった「鋭い出足」と「がぶり寄り」が出せなかったことだろうと見ている。

とは言うものの、新大関の場所・出身地福岡での歓声の大きさなど数々のプレッシャーの中で自分の持ち味が充分に発揮されていた。11勝4敗の成績は船出の場所の出来としてはまずまずではないかと思う。

自分の相撲の型を持っているので、15日間波なく持ち味を發揮できるようになれば安定した大関になることができると期待している。

いずれにせよ、一横綱五大関となる来場所は色々な意味で大関陣に厳しい評価の目が向けられるに違いない。

### < 3 > 再び新大関誕生

稀勢の里の大関昇進への挑戦も今場所の目玉のひとつだった。

前半戦は腰が下りて膝も曲がり、かなり安定した位置からの鋭い突き・押しで「力強い落ち着いた相撲」を感じさせた。中日で7勝1敗は先が期待できる出来栄えだったが、勝ち越しを意識して固くなったのか、中日以降の相撲には別人のような不安定さが見られた。しかしながら、豊富な稽古量で基礎がしっかりしているせいか、琴奨菊などの辛勝も追い風となり後半戦を乗りきった。10勝5敗という成績は期待値からするとやや物足りぬ気もするが、内容がある実績だったと言える。

大関昇進への目安として直前三場所で33勝という言葉が飛び交っているが、これは決まり事でもなんでもない。私の見解では、直前三場所の成績で「一過性の勢い」だけで昇進を判断するのはかなり危険だと思う。

直前三場所の成績を参考にしながら「直前六場所の成績で安定性を評価」する方が望ましい。

その点でも、稀勢の里の直前六場所の成績は60勝30敗(勝率0.667)で、琴奨菊の62勝28敗(勝率0.689)と共に十分に評価できるものだと見ている。

### < 4 > 新しい力の台頭

新入幕の碧山・妙義龍・松鳳山・佐田の富士が勝ち越しをしたのは今場所のトピックスと言える。

中でも妙義龍の相撲が光っていた。低い腰の位置と膝の角度、そして前傾姿勢が保たれたまますり足での攻めと守り、しかも負けた相撲でもこの形が守られていた。立ち合いからの鋭い突っ込みもあり、叩いたり引いたりしない前進相撲は将来の成長を予感させた。10勝5敗、技能賞を授与しても良いような素晴らしい相撲だった。

碧山は外国人力士らしくなく低い腰の位置を保つことができ、体を活かした四つ相撲がとれていて11勝4敗の好成績をあげた。把瑠都よりもはるかに基本をマスターできている感じがした。

松鳳山は黒光りする体躯で、突き押しあり、流れの中での投げ技もありの「攻め」を感じさせる相撲だった。中日まで5勝3敗とさして目立った星でもなかったが、後半になるほどに攻めの相撲が目立つようになり、

10勝5敗は見事な成績だった。

佐田の富士も突き押しを基調とした前進型の相撲で、叩かれて負けることはあっても叩いて勝つことはない好感を抱かせる力士だ。白星・黒星を繰り返してやきもきさせたが、最終的には8勝7敗で締めくくった。この四力士に共通しているのは、「毅然とした面構え」「低い構え」「前に進む力」であり、いずれも豊富な稽古量を感じさせる将来有望な若手力士たちである。

### < 5 > 三賞の行方と今後について

殊勲賞＝該当なし 技能賞＝稀勢の里 敢闘賞＝若荒雄・碧山 という結果になった。

横綱が14日間黒星なしで走ってしまうと殊勲賞に該当する力士は出てこないのではやむなき結果であろう。新入幕ながら相撲の基本をきちんと身に付けて、それに拘って前へ進む相撲に徹していた妙義龍に技能賞をあげても良いのではないかと思った。稀勢の里は大関昇進の手土産の殊勲賞だとすれば、将来に資する物として、新入幕の力士に技能賞を出す冒険もあって良かったかもしれない。

ひたすら叩き込みばかりで勝ち星を挙げた若荒雄に敢闘賞を授与するのは如何なものかと思う。彼の相撲は「叩くことを前提にした相撲」ばかりで、観客席からのブーイングも何度か聞こえた。相撲記者クラブの見識を疑いたくなるような結果となった。私なら、西六枚目で11勝4敗を上げて、来場所小結復帰の可能性もある元大関の雅山を選びたかった。

相撲記者クラブに委ねる三賞に頼るばかりでなく、入幕後三場所以内の若手力士の中で顕著な活躍をした力士に相撲協会が「理事長特別賞」のようなものを毎場所出したら活性化効果があるのではないかと思う。

### < 6 > 今こそ大相撲改革を

二場所続けて新大関誕生というおめでたい話で場所が終わったが、まだこれに続きたしとしているライバルや若手力士達がいるのは素晴らしいことと言える。

しかしながら、私はここでひとつ大きな課題が見えてきていると思っている。

相撲協会には明確な大関昇進の定めはないらしい。マスコミが作り上げた「直前三場所 33勝が目安」という基準もどきにぶら下がっているだけに過ぎない。明確な規定に基づくものではない定めで昇進を判断して行くと、「新大関が欲しい」「横綱になれる大関はいないか?」「日本人の大関・横綱を作りたい」という願望やムードだけが先行してしまう危険性がある。

まずは相撲協会としての「大関昇進基準」を明確にする必要がある。基準の中では「関脇として安定した成績を残し続け上を狙うに値する」ことを判断できるものでなければならない。そのためには前述のように、「直前六場所の成績」と「直前三場所の成績」とを並べて評価する必要がある。

また、大関という地位には「連続二場所負け越すと降格」、「降格直後の場所で10勝すれば復帰」という定めがあるが、これも特権としての効果はあるかもしれないが、良質な大関を作ることを阻害している。二場所に一回だけ8勝7敗できればその地位が守れるということでは質は上がって行かない。この降格基準にも「六場所で一定の勝率を上げていないものは降格の対象となる」という厳しい定めも必要である。

昇格基準と降格基準を明確にかつ厳しいものにしていかないと、大関という特権地位を守るだけになってしまい、一横綱八大関のような体制が出来上がってしまうかもしれない。

以上